

環浜名湖田園都市の可能性 ー環浜名湖地域における持続可能な地域づくり研究ー

A study for sustainability of lakeside area of the Lake Hamana

宮川 潤次

デザイン学部空間造形学科

Junji MIYAKAWA

Department of Space and Architecture, Faculty of Design

黒田 宏治

デザイン学部生産造形学科

Kohji KURODA

Department Industrial Design, Faculty of Design

田中 啓

文化政策学部文化政策学科

Hiraki TANAKA

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿は、「環浜名湖地域における持続可能な地域づくりの可能性」の研究成果の概要である。本研究では、今後の地域発展に不可欠な要素と考えられる「環境」、「コミュニティ」、「観光」をキーワードとして、浜名湖と湖岸地域の潜在的な環境資源の抽出と地域活性化の可能性を探った。現地調査及び学内外メンバーによる浜名湖地域研究会での研究を進め、その成果の一部を「環浜名湖田園都市構想提案」としてインターネット上で公開した。また、研究活動の一環として浜名湖の自然環境保全と湖岸の地域づくりを考える市民活動グループ「はまなこ学遊倶楽部」を設立した。

This paper is the outline of result of the research "Possibility of sustainable communities in the Lake Hamana area". In this research, the extraction of latent environment resources of the Lake Hamana and the lake shore area and possibility of the revitalization were searched. "Environment", "Community" and "Tourism" were made as key words. A part of the result of this research was introduced to the public on the internet as "The Garden city in the Lake Hamana area", a proposal plan of sustainable community in those area. And, the citizen group "The Lake Hamana gakuyu-club" was established, which thought about the natural environment preservation of the Lake Hamana and green development of the lake shore area as a part of this research activities.

■はじめに

本稿は、H17年度本学学長特別研究「環浜名湖地域における持続可能な地域づくりの可能性」の研究成果の概要である。

浜名湖は、全国でも有数な汽水湖として豊かな自然環境に恵まれ、内水漁業やレジャーの場として利用されてきた。また古くから東西を結ぶ交通の要所としても知られている。湖岸地域では、平成16年に庄内半島で浜名湖花博が開催され多くの観光客を集めた。花博により県内外での浜名湖の知名度が高められたとともに、関連事業の「はまゆう大橋」の建設や浜名湖大橋の無料化などの交通網整備により庄内半島地域の交通利便性が飛躍的に高まった。これにより地域の発展性が高まると同時に無秩序な乱開発が危惧された。同年6月には先駆的な環境共生型施設「地球のたまご（OMソーラー協会）」が建設され、湖と湖岸の環境保全・再生に対する湖岸施設の役割の重要性が示された。また、平成17年7月の合併で浜名湖岸の細江町、三ヶ日町、雄踏町、舞阪町が浜松市となったことから湖岸地区を連帯した地域マスタープランが求めら

れた。

これらをふまえ、本研究では、21世紀の浜名湖沿岸地域における持続可能な地域環境のあり方について、「環境・コミュニティ・観光」を今後の地域発展に不可欠な要素として仮定し、浜名湖と湖岸地域におけるエコロジカルな環境とコミュニティの形成、そしてそれを環境資源とした体験型観光と教育・研究の場としての地域の活性的利用の可能性を探った。

研究推進の手法として、学外のメンバーを含む浜名湖地域研究会を設けるとともに、地球のたまごを拠点とする市民活動グループ「はまなこ学遊倶楽部」を発足し、勉強会やワークショップ等のイベントを通して関連情報の収集を行うとともに、浜名湖の環境保全・再生、湖岸地域の持続可能な地域づくり活動の展開を呼びかけた。

1. 浜名湖と湖岸地域の概要

浜名湖と湖岸地域について関連資料の収集分析を行うとともに、市町村行政関係者及び農業関係者等へのヒアリングを行った。

1-1. 浜名湖の概要

浜名湖は周囲128km、水域面積70.4km²、平均水深4.8m（最深16.1m）、我国第10位の大きさを持つ汽水湖である。南端の幅200mの「今切れ口」により遠州灘につながり、1日に4,230万トンの海水が出入している。都田水系の一部で流域面積は524km²である。湖の誕生以来、湖口の開口と閉塞が繰り返され、それにより塩水湖と淡水湖とを繰り返してきた。淡水湖の時代には、都に近い琵琶湖が「近江」、遠い浜名湖が「遠江（遠淡海）」と呼ばれていた。今のような塩水湖になったのは約500年前で、明応7年（1498）の大地震の大津波により湖口が開いて遠州灘とつながった。今切口は、それから数百年の間にも地震、津波、台風等の災害、明治以降の開発等により大きく変化した。近年では、昭和28年の台風13号により今切口が幅800mに拡大し沿岸地域に大きな被害を与えた。昭和47年に今切口の固定化工事が完成し、現在の姿になった。

魚介類は魚、エビ・カニ類、貝類など650種類以上が確認されており、約30種が漁獲対象になっている。また、幼魚が多く成魚が少ないことが特徴の一つといわれている。湖内で生まれる魚介類の数が多いほか、遠州灘から潮とともに多種多様な魚介類の卵や幼稚仔（ようちし）が今切口を通り湖内に流入してることが理由としてあげられており、浜名湖は駿河湾や外洋の漁業資源を育てる海のゆりかごとして大きな役割を担っている。

沿岸漁業では、採貝（アサリ）、湖面漁業（魚、エビ・カニ）、養殖（ノリ、カキ）が行われている。平成11年の漁獲高は約3,800t（約18億円）で生産性の高い漁場となっている。

観察される水鳥の種類も多く、カワウ、コサギなど年間を通して見られるものの外に、夏季にはコアジサシ、冬季にはスズガモ、オナガカモなど多くの渡り鳥が見られる。

湖面は、漁業とともに潮干狩りやプレジャーボート等のマリナーレジャーの場として利用されている。道路が発達していない時代には、湖の南北地域を結ぶ「巡航船」や東西を結ぶ「渡し」などの水上交通が重要な役割を果たしていたが、現在は一部の観光ルートを除いて廃止された。

水質については、湖岸の宅地開発や農地整備に伴って生活排水・肥料養分の流入等による水質汚染が進んだが、近年の下水道整備によって水質の向上が見られている。水質を示す基準のひとつであるCOD値は、平成13年以降おおむね基準値を満たしている。しかし、かつて子供たちが泳いだという澄んだ湖水は戻っていない。特に閉鎖性の高い猪鼻湖では水質悪化が進んでおり、浄化対策が急がれている。

1-2. 湖岸地域の概要

湖岸地域を大きく舞阪・新居、湖東、庄内半島、奥浜名湖、湖西の5地域に分け、各地域の特徴を考察した。

●舞阪・新居地域

浜名湖と太平洋がつながる今切口、舞阪、弁天島、新居周辺の地域。旧東海道沿いの宿場町として歴史を持ち、舞阪の松並木、脇本陣、新居関所など史跡も多い。明治時代から養鰻が盛んな地域として知られたが近年は衰退して養鰻池の多くが埋め立てられた。弁天島は、白砂青松の景勝の保養地として人気があったが、昭和初期に乙女園、蓬萊園、千鳥園、観月園の4つの人工島が造られ、湖畔の景観が大きく変わった。大鳥居周辺に広がる「いかり瀬」ではコアジサシなどの渡り鳥のコロニーやハマヒルガオの群落など貴重な自然景観が見られる。

<景観資源>弁天島の大鳥居、湖上からの湖岸景観、今切口、いかり瀬、養殖池、舞阪の渡船場跡、脇本陣、新居関所、紀伊国屋など

●湖東地域

ダイダラボッチの親指の跡にあたる庄内湾と東側湖岸の旧雄踏町地域。農業と漁業を主とする地域だったが、バイパスの建設や沿道の大規模ショッピングセンターの進出などにより急速に市街化が進んでいる。また、浜松市との合併によって、浜松市の郊外住宅地としての色合いが強められた。新川につながる「堀留運河」は浜松と対岸の鷺津を結ぶ物資の重要な輸送路であった。夕闇の中に小船を出して浅瀬のカニや小ダコを銚（モリ）でつく「たきや漁」も人気がある。

<景観資源>たきや漁、遊漁船がもやう船溜、庄内湾の水辺と干潟、中村家住宅など

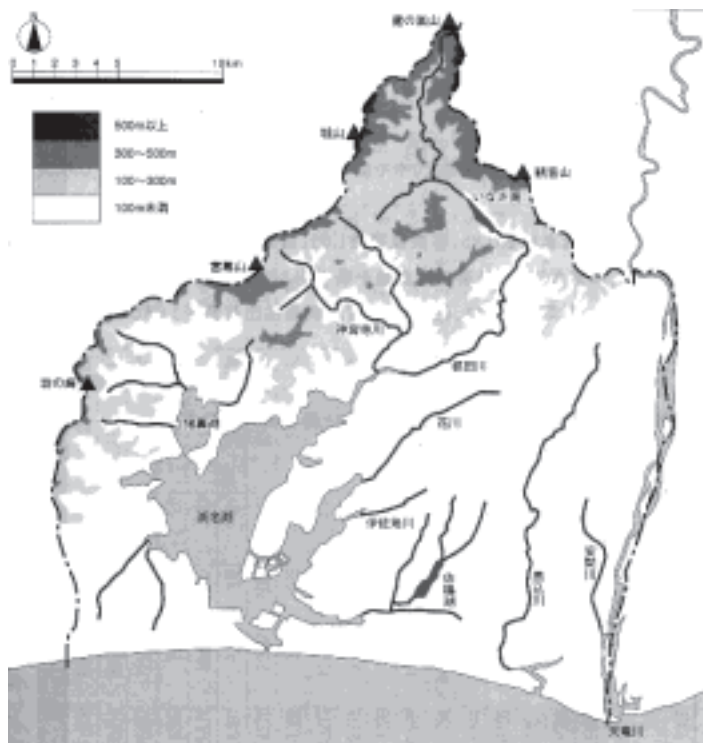
●庄内半島地域

浜名湖の中央部に張り出した半島部。北部は、館山寺温泉、フラワーパーク、動物園などレジャー施設が多い。館山寺は江戸時代には半農半漁の寒村だったが、昭和の始めに水上交通の要所として旅館や料理屋が増え、海水浴場としても人気が高まった。中部は農業を主とした地域で、キク、ガーベラなどの花卉栽培で知られている。南部の村櫛町は織物の町として栄えた。また、町営酒場や共同浴

場、子供たちの夜回りなど、住民の結びつきが強いことでも知られる。大正から昭和初期に行われた大規模な埋立地には、現在、研修施設や情報研究施設が立地している。また2004年開催された浜名湖花博跡地は県立ガーデンパークとして利用されている。
 <景観資源> 館山寺温泉の水辺、村櫛の町、地球のたまごなど

●奥浜名湖地域

館山寺内浦湾、引佐・細江湖、猪鼻湖周辺。



<図 1> 浜名湖・湖岸地域地形図



<写真 1> 弁天島海浜公園



<写真 2> 奥浜名湖寸座の入り江

表浜名湖と比べると湖岸の自然景観が良く残されている。「姫街道」は、西の三ケ日から本坂峠を越えて豊川方面に至り、東は浜松へと至る主要な陸上交通路であった。細江には姫街道に置かれた気賀関所が再建されている。また、浜名湖の主流となる都田川の沿岸には水田が広がってのどかな田園景観が見られる。三ケ日はミカンの産地として知られており、猪鼻湖の瀬戸付近では湖岸近くまで山が迫って美しい景観を創り出している。瀬戸のわずかな水路で浜名湖本体と結ばれていることから湖水の滞留などによる水質悪化が問題になっている。また、東名三ケ日インターに近い大崎半島ではバブル期にリゾート開発が進められ、宿泊施設やリゾートなどが建てられている。

＜景観資源＞浜名湖周遊自転車道、姫街道と関所、寸座、奥浜名湖展望公園、猪鼻湖と瀬戸、ミカン山など

●湖西地域

浜名湖の西岸、松見ヶ浦から新所、鷺巣周辺。松見ヶ浦はヨットやジェットスキーなどのマリナーの基地になっている。宇津山城跡の小山を背景にして白い帆柱が立ち並び様はリゾート地としてのポテンシャルを感じさせる。また、入出漁港は石積みの船溜りに小船がもやう小漁港。船の出入りには今でも「手漕ぎ」の櫓を操るといふ。ゆったりとした時間が流れる一昔前の漁村の風情が残されている。新所は舞阪から堀留運河を通して浜松と結ぶ「渡し」の渡船場、鷺津は奥浜名湖と表浜名湖を結ぶ「巡航船」の汽船場としてそれぞれ湖上を巡る水上交通の要所であった。湖西市は畜産と農業が盛んであったが、近



＜写真 3＞入出漁港の舟溜り

年は企業誘致に力を入れている。

＜景観資源＞松見ヶ浦、入出漁港、白須賀宿など

2. 課題の抽出

2-1. 持続可能な社会づくりに向けた社会的課題

20 世紀は、科学技術の発達とそれに基づく産業の発展により人々の快適な暮らしを大きく進めた時代であった。その結果、エネルギーの大量消費とそれに伴うCO₂排出の急激な増加などにより環境破壊という大きな負の遺産も抱えることになった。地球温暖化など地球全体の環境悪化が急速に進むとともに、身近な都市・地域の環境や、個々の施設のレベルでの環境悪化が大きな問題である。また、石油など再生不可能な化石資源の大量消費、水資源の保全も重要な課題としてあげられている。

一方、我が国では高齢化・少子化の急激な進行が大きな問題となっている。国立社会保障・人口問題研究所の推計では、総人口の減少と高齢化により 2015 年には国民の約 25 %が 65 歳以上の高齢者で占められると予測されている。現状では、高齢者が充実した暮らしを営むことや若い世代が安心して子供を育てられる生活環境がとられていない。

今後の持続可能な社会づくりに向けて、環境負荷の少ないエコロジカルな循環型社会と、人々が安心して暮らせるコミュニティづくりが求められている。

2-2. 浜名湖沿岸地域における地域的課題

浜名湖の沿岸地域の状況を見ると、経済発展期には織物や養鰻などの産業が盛んに行われ発展してきたが、近年は海外製品との価格競争や農家の高齢化などによって低迷し、地元産業の継続が危ぶまれている。特に北部地域は都市部に比べて高齢化・少子化が著しく、産業とともに地域コミュニティの持続が危惧されている。

環境保全や地域づくり活動では、120 を超える市民グループが浜名湖と周辺地域のまちづくりや環境教育などに係っており、これらの協働のためのネットワーク化が進められて

いる。また、平成 17 年の合併により新浜松市が誕生し、平成 19 年に政令指定都市への移行が予定されており、新市の総合計画や環境基本計画、天竜川・浜名湖環境共生計画など、今後の環境保全や地域づくりに係る重要な方針づくりが進められている。

●人口動向／高齢化・少子化の進行、第 1 次産業従事者の減少

全国の人口は2006年度から減少傾向に転じた。浜名湖地域は、旧浜松市と旧細江町で人口増加があるため2015年までわずかな増加傾向が続くものの、その後は減少してゆくと予測されている。平成 12 年度の 65 歳以上の高齢者の比率は約 17%。年少人口は約 15%で、全国平均にほぼ等しい。地域別では、旧浜松市、舞阪町、新居町で高齢者の増

＜表 1＞持続可能な地域づくり／課題の抽出

持続可能な地域づくり／課題の抽出		
	社会的課題	浜名湖地域が直面する課題
環境	<ul style="list-style-type: none"> ・地球温暖化 /CO₂ 排出増加 ・緑地の減少 ・自然 / 生態系の破壊 ・水環境の悪化 ・ゴミ排出の増加 	<ul style="list-style-type: none"> ・緑地の減少 <ul style="list-style-type: none"> ：森林／里山の荒廃 ：農地の減少・荒廃 ：市街化調整区域の無秩序な宅地化 ・浜名湖・河川の汚染 <ul style="list-style-type: none"> ：産業・生活排水、農薬、ゴミなど ・浜名湖沿岸の景観破壊 ・浜名湖の生態系の変化
エネルギー	<ul style="list-style-type: none"> ・エネルギーの低自給率（水力 4%、原子力 16%） ・化石燃料の枯渇 ・エネルギーコストの増加 	<ul style="list-style-type: none"> ・車への依存度が高い ：公共交通機関の不足 <p>*エネルギー問題への関心は低い</p>
人口	<ul style="list-style-type: none"> ・人口構造の急激な変化（高齢化・少子化） ・人口減／生産人口の減少 ・都市圏への人口集中 	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者比率の増加 ・子供の減少 ・人口減／若い家族の減少 <ul style="list-style-type: none"> ：小学校の廃校など、地域コミュニティの崩壊に至る
食料健康	<ul style="list-style-type: none"> ・食料自給率の低下（熱量ベースで自給率 40%） ・生活習慣病の増加 ・アレルギー疾患の増加 	<ul style="list-style-type: none"> ・農家・農地の減少（離農、農地転用の増加） ・放棄農地の急速な増加 <ul style="list-style-type: none"> ：農家の高齢化、後継者難 ：除草剤の使用増加 ・浜名湖漁業の衰退
経済産業	<ul style="list-style-type: none"> ・経済低迷の長期化 ・財政危機（借金 763 兆円／GNP の 1.5 倍） ・失業者の増加（完全失業率 4.5%、300 万人） 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域産業の衰退・低迷 <ul style="list-style-type: none"> ：養鰻業の衰退 ：織物産業の衰退 ：農林水産業の衰退傾向 ：観光業の伸び悩み

加比が高く、引佐、三ケ日で少子化傾向が強く現れている。地域全体で少子化が進む中で高齢者が利便性の高い都市部での居住を望むためと思われる。

産業別人口では、第1次産業（農林水産）従事者が急減している。後継者不足から今後も減少が進み、1995年の約2万人から、2025年には約1.1万人にまで減少すると予測されている。

農業を例にとると、全国の農家人口のうち65才以上の高齢者の比率は約29%であり総人口に占める割合に比べて著しく高い。60才以上の比率は52%で、農家の半数以上が60才以上によって維持されていることになる。

●土地利用／農地の減少と遊休農地の増加

土地全体に占める宅地の比率は、旧浜松市27%、雄踏20%、新居町18%の順で市街化の比率が高い。湖西市は15%、他は10～12%となっている。田畑の面積は湖岸地域全体で1980年の18,437haから2000年には14,029haに減少した。20年で田畑の約

1/4が失われたことになる。

遊休農地の増加も問題となっている。2005年の全国の遊休農地の面積は東京都の1.5倍に相当する34万haに達している。湖岸地域全体でも、今後10年間で9,000ha以上の遊休農地が発生すると予測されている。これは浜名湖の面積の約1.3倍に相当する。

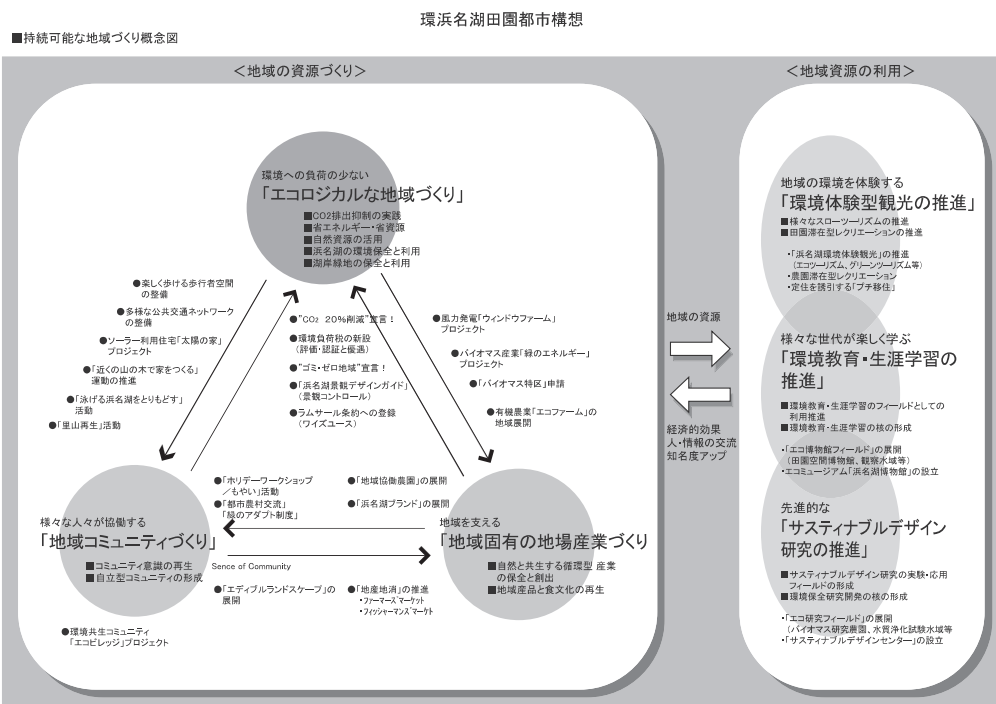
3. 環浜名湖田園都市構想案

浜名湖沿岸地域を結んだ持続可能な地域づくりを進めるためには、各地域の地域住民及び行政が基本的方針を共有することが不可欠である。その認識のための試案として、地域の潜在的な環境資源を活かした循環型の地域モデルを「環浜名湖田園都市構想案」として提案した。

3-1. 基本方針

●「地域の資源づくり」の目標

地域住民と行政が協働して地域の資源づくりを進める。



＜図2＞「環浜名湖田園都市構想案」概念図

- ・エコロジカルな地域づくり
- ・地域コミュニティづくり
- ・地域固有の地場産業づくり

●「地域資源の利用」の目標

地域の資源を新たな体験観光・環境教育・環境研究開発に利用する。

- ・環境体験型観光の推進
- ・環境教育・生涯学習の推進
- ・サステナブルデザイン研究の推進

3-2. 主要プロジェクト

目標の実現化に向けた具体的な事業展開例として12の主要プロジェクトを提案した。

●1：持続可能な地域づくり宣言

環浜名湖地域を、全国に先駆けた持続可能な地域とすることを宣言し、その実現をめざす。

CO₂排出や自然エネルギー利用、ごみ減量等の環境負荷低減や、バランスの取れた人口構成などの重要項目に対してできるだけ具体的な目標を設定するとともに、その実現のために地域住民と産・官・学が協働して行動する。

●2：環境負荷税の導入

CO₂排出削減を具体的に進めるとともに、自然環境への負荷の少ない循環型の地域環境と地域住民の生活スタイルを普及するための「環境負荷税」を設ける。CO₂排出の大きな部分を占める建築物の冷暖房や産業施設、及び自動車の利用によるエネルギー消費と、環境悪化の原因となる汚排水や排熱、排気等を課税対象とする。

同時に、環境負荷の少ない建築物や製品の評価システムを設け、評価ランクによって税の減免、あるいは褒章の助成などを行うことにより環境負荷低減への自主的な行動を導く。

●3：田園遊歩空間ネットワーク

車への過度の依存から離れたスローライフの実践として、歩行と自転車を主とした連続的な歩行者空間ネットワークを形成する。奥浜名湖、湖東、庄内、湖西、表浜名湖の5つの地域でそれぞれの地域特性に合った地域遊

歩空間をつくるとともに、それらをリンクと南北軸で結ぶことにより環浜名湖地域の田園遊歩空間ネットワークを形成する。

また、鉄道への自転車の乗り入れ、浜名湖を周回するバス路線の整備、シャトルタクシーの導入、水上交通の復活など、歩行者にとって快適で利便性の高い公共交通システムの整備を進める。

●4：北風と太陽

地域のCO₂排出削減の手段として、エネルギーの使用量を削減するとともに、石油や天然ガスなどの化石燃料の使用を大幅に少なくすることが求められる。太陽エネルギーや風力を利用した自然エネルギーは、CO₂を排出しないクリーンなエネルギーとして利用推進が望まれている。

環浜名湖地域は年間の日照に恵まれており、また春から初夏の時期を除いて強い風が吹く地域である。これらの気象条件を利用して、太陽エネルギーを使用した冷暖房やソーラー発電、風を利用した風力発電を推進し、環浜名湖地域の電力使用量の10%（5000万kwh）を自然エネルギーでまかなう。

●5：バイオマス素材の生産と利用

農作物をメタノール等のエネルギー素材として利用するバイオマスエネルギーは、CO₂排出を増加させることのない再生可能なエネルギーとして期待されている。また、植物を素材とした工業素材は石油樹脂プラスチックに代わる再生可能な自然素材として工業製品に利用されている。

湖岸地域で急増している耕作放棄農地を利用してエネルギーや工業製品の素材となる作物を栽培するとともに、環境負荷の少ない燃料や素材を用いた製品の利用を推進する。

●6：緑のコミュニティ

環境負荷の少ない「エコロジカルな居住環境」と、多様な世代が互いに助け合って暮らす「バランスのとれたコミュニティ」づくりをめざす。太陽エネルギーや風力などの自然エネルギー、バイオマスエネルギー、燃料電池等の先進的技術の利用やコミュニティ農園など、エネルギーと食の自給、コンパクトなまちづ

くりなどを基本としたエコ・ビレッジの建設を支援するとともに、既存集落のエコビレッジ化を進める。また、住民によるコミュニティ運営や店舗・オフィスなど雇用の場の創出、保育施設の充実など、特に子育てをする若い世代を地域全体で支えることなど、持続可能なコミュニティのしくみをつくる。

● 7：湖岸の緑と水辺景観を守る

浜名湖の景観の重要な要素であり、浜名湖が形成された歴史を物語る貴重な風土資源でもある斜面緑地（河岸段丘）を「景観緑地」として保全・再生し、次代に受け継いでゆくとともに、維持のための有効な利用を図る。また、浜名湖の自然景観と調和した湖岸景観を形成するため、建築物等の色彩や素材について規制・誘導を行うとともに、水辺から斜面緑地の眺望を確保すること、圧迫感を低減して良好な景観を守るため、湖岸から一定距離内の建築物等の高さを制限する「景観斜線」を設けるなどの景観コントロールを行う。

● 8：泳げる浜名湖をとりもどす

浜名湖の水質は、湖岸地域の下水道整備等によって数値的には向上しているが、湖岸地域の子供たちが泳ぎまわったきれいな水は失われたままである。かつての澄んだ水を取り戻すために、地域が一体となって湖岸地域の生活排水や産業排水の浄化、農薬・化学肥料使用の抑制、湖のゴミ清掃、アオサの除去などを進めるとともに、水源となる緑地の保全や沿岸部での雨水浸透、雨水利用により自然な水循環を再生する。また、浜名湖を渡鳥の飛来地環境を守る国際条約「ラムサール条約」への登録をめざす。

● 9：地域協働農園

地域内で急増する耕作放棄農地を、農家と地域及び都市部住民の協働による「地域協働農園（コミュニティファーム）」として再生する。地域協働農園は、有機野菜の生産や都市部住民のレクリエーション、エコツーリズムの場、及び都市環境を守る緑地の役割を持たせるなど、多機能農地として有効に利用する。また、地域協働農園と都市部食品関連企業と消費者が協力し合うネットワークを形成し、

ゴミの堆肥利用を進めるコンポストリンクを形成する。また、協働農園相互が協力してグリーンツーリズムの展開に対応するとともに、地域全体での農薬・肥料の低減を進めて浜名湖と流域河川の水質汚染を防ぐ。

● 10：環境体験スローツーリズム

浜名湖の景観やレクリエーションを楽しみながら浜名湖の環境を学ぶとともに、湖岸地域に展開される環境共生コミュニティのエコロジカルな暮らしやエコファームでの畑仕事、工芸などを、ゆっくりと時間をかけて体験するスローツーリズムを展開する。

既存観光地をスローライフや「地産地消」の食文化を楽しめるエコ・テーマパーク型のリゾート地として再構成するとともに、様々なエコツーリストのニーズに合った多様な宿泊スタイルを提供する。また、これらの環境体験資源の情報を発信するエコ・フィールドマップを作成する。

● 11：エコミュージアムネットワーク

湖岸各地域の歴史博物館や展示館を、環境教育・生涯教育のためのエコミュージアムネットワークとして再構成するとともに、浜名湖と湖岸地域の自然環境に係わる情報を集積した中心的施設「エコミュージアム／浜名湖自然科学博物館」を設立する。博物館は、展示機能とともに、地域のエコツーリズムの案内施設や環境保全に係わる市民活動の核として重要な役割を持つ。

また、浜名湖と湖岸の緑地や環境共生型のコミュニティを、環境教育・生涯学習、エコツーリズムなどのための屋外博物館フィールドとして利用する。

● 12：サスティナブルデザイン研究

浜名湖と湖岸地域に展開される環境共生型のコミュニティを研究フィールドとして、サスティナブル（持続可能）な社会づくりを推進するための環境保全・利用技術及び社会システム等の研究・開発機能を集積するとともに、その活動の核となる中心施設を設立する。

4. 市民協働活動の展開

研究活動の一環として、浜名湖と湖岸地域の環境を考える市民協働活動「はまなこ学遊倶楽部」を設立するとともに、既存の市民活動グループのネットワーク化を進める「はまなこ環境ネットワーク」に参加して活動を推進した。

4-1. 「はまなこ学遊倶楽部」の活動

浜名湖と湖岸地域について楽しく学びながら、今後の地域づくりなどを考える市民の会として平成17年4月に設立した。平成17年度には、湖岸に建つOMソーラー協会の環境共生型施設「地球のたまご」を会場として、勉強会や地域資源を探るワークショップ「はまなこ学遊塾」を8回開催した。また、湖岸地域では農家の高齢化と跡継ぎ不足から耕作放棄農地が急増しており地域緑地としての農地荒廃が問題となっていることから、持続可能な地域づくりを支援する活動の一環として、学遊倶楽部メンバーと静岡文化芸術大学学生がこれらの放棄農地を耕作する活動も行っている。

4-2. 「はまなこ環境ネットワーク」への参加

はまなこ環境ネットワークは、浜名湖憲章に賛同する市民グループ、企業等が連携して活動する場を創出することを目的に平成17年3月に静岡県の支援により設立された。インターネットでの各グループ活動の広報と情報交換、協働イベントの開催などを行っている。はまなこ学遊倶楽部もネットワークに参加し、平成17年度はコアスタッフのメンバーとして協働活動の企画を行った。平成18年度にはネットワークに参加する活動団体の交流イベントを行うとともに、各団体の自主的な活動をネットワークとしてまとめた協働活動月間が予定されている。

■終わりに

本研究の研究成果は、平成18年4月に学内研究組織として発足した「サスティナブルデザイン研究会」に引き継がれ、環浜名湖地域における持続可能な地域づくりを実践するための展開の研究が進められる予定である。

また、「はまなこ環境ネットワーク」により浜名湖と湖岸地域の環境保全・再生活動を進める市民活動の協働の動きも加速しており、本学における研究活動がこれらの市民活動と連携することにより、今後の具体的な実践活動が進められるものと期待される。

<参考文献>

- ・神谷昌司『浜名湖・歴史と自然と文化』名文出版社、1985
- ・神谷昌司『遠州の史話』静岡新聞社、1990
- ・杉野孝男『浜名湖図鑑』静岡新聞社、1991
- ・浜松市庄内公民館『わが町文化史青い湖と緑の半島庄内』1995
- ・浜名湖地区水産振興協議会「浜名湖地区の水産」2001
- ・環浜名湖政令指定都市構想研究会「環浜名湖政令指定都市構想研究会報告書」2003
- ・浜松市「浜松市自然環境資源調査報告書（整備方針編）」2002
- ・静岡県「浜名湖水環境保全計画」2001
- ・西遠地区広域市町村協議会「第4次西遠地区広域市町村圏計画」2001
- ・松田雅央『環境先進国ドイツの今』学芸出版社、2004
- ・中島理恵『英国の持続可能な地域づくり』学芸出版社、2005
- ・ケンジ・ステファン・スズキ『デンマークという国自然エネルギー先進国』合同出版、2003
- ・ジークフリート・ペーレント他、山本良一監訳『ライフサイクル・デザイン』カタログハウス、1999
- ・竹崎孜『スウェーデンはなぜ少子国家にならなかったのか』あけび書房、2002
- ・Michael Corbett『Designing Sustainable Community』Island Press、2000
- ・Anne-Marie Sacquet『World Atlas of Sustainable Development』Anthem Press、2005